

都市解釈的方法的枠組みとしてのタウンウォッチングに関する研究

A Study on "Town Watching" as a Methodological Frame of Interpreting Cities

真田純子^{*}, 中村良夫^{**}

Junko SANADA^{*}, Yoshio NAKAMURA^{**}

ABSTRACT; This thesis intends to clarify a methodological frame of interpreting cities. A new point of this thesis is that the clarified frame is organized on the interpreted landscape, not on the physical one. In order to get the elements as the frame, town watchers' viewpoints have been detected. From the viewpoints, the elements are clarified as following.

1. LIFE--- the life of changing cities, human warmth, etc.. 2. VARIETY--- composition of various atmosphere, high and low of land, nature in the town, etc.. 3. VIEW--- contrast of artificiality structure and nature, beauty of nature and traditional things, etc..

KEYWORDS; methodological frame on the interpreted landscape, viewpoint, life, variety, view

1 研究の背景と目的

魅力的なまちをつくろうと計画されたものが、そのねらい通り魅力的だったり、意に反しておもしろみに欠けてしまっていたりすることがある。また、看板や電柱が氾濫し、汚くて下品な場所に活力や気安さを感じられてなぜか魅力的だったりすることもある。都市景観をデザインする際に用いている概念の枠組みで捉えられた「魅力の所在」と、私達が都市景観に対して感じている魅力に違いがあるからではないだろうか。

私達が都市景観を認識する時、住宅地であるとか商業地であるとか、「物」で分けられた枠組みをいつも用いているわけではない。それらの言葉は、他者とのコミュニケーションを行う上で、同じ「物」を指すことができるという利便性を持っているが、生活者や都市を散策する者は、都市を認識するとき、それらの言葉を用いた枠組みで都市を把握してはいないだろう。「生活感のある場所」「まちの裏」といった都市解釈枠組みを使って都市を把握しているのではないだろうか。ある人にとっての皇居東御苑^{注1)}と、別のある人にとっての新宿副都心の高層ビル群^{注2)}は、共に「虚の空間」という都市解釈枠組みで捉えられているのである。高級住宅街、高層ビル群という、一見全く異なる種類の場所のように思えるところが、「その中にいると日常から切り離され、落ち着くことのできる場所」として把握されている。

また、私達がある景観を見た時、そこにある視覚像をそのまま私達の評価材料にしているのではなく、視覚像やその他の知覚像から他者には知覚できないものを連想し、それを判断材料としてその景観を認識している場合もある。バス停に置かれた家庭用の椅子^{注3)}や民家の玄関先に置かれた鉢植え^{注4)}を見て「それを置いた人」を連想し「そんな人たちの住んでいるまち」の雰囲気を感じ取ることともあるのである。

このように、認識された像である「風景」は必ずしも「図像」の分析から把握できるわけではなく、形で

* 東京工業大学大学院社会理工学研究科社会学専攻 修士課程 Graduate School of Decision Science and Technology, Dept. of Social Engineering, Tokyo Institute of Technology

** 京都大学工学研究科土木システム工学専攻教授 東京工業大学大学院社会理工学研究科社会学専攻(併任) Graduate School of Engineering, Dept. of Civil Engineering Systems, Kyoto University Graduate School of Decision Science and Technology, Dept. of Social Engineering, Tokyo Institute of Technology

は表現できない「文脈」として捉える必要がある。

したがって本研究では、「文脈」として捉えられた風景を分析対象とし、私達が都市景観を認識しているときの都市解釈的方法的枠組みを新たに捉え直すことで、都市における魅力の所在を明らかにすることを目的としている。

ケヴィン・リンチは、都市の美しさの特性の一つとして、イメージアビリティ（わかりやすさ、明白さ）をあげ、イメージアビリティをもたらす要素として、強いイメージを生む「物理的な空間の要素」を5つあげた。¹⁾ 本研究では、リンチのように「物理的な空間」を分析対象にするのではなく、「解釈された空間」を対象にし、魅力をもたらす要素をその中から探し出すことを試みている。

2 分析データの選定

2.1 分析対象の選定

本研究では、都市を解釈する行動としてタウンウォッチングに着目した。タウンウォッチングというと、都市の中の風変わりな物を探すというような「都市探検」などの特別な行動を刺す場合が多いが、本研究では「タウンウォッチング」を、学校の行き帰りや買い物など、日常生活をしながら都市景観を見たり、その他の体験を通して解釈している行動全般をいうものとしている。

2.2 分析データの選定と概要

データとして、タウンウォッチングをした感想をもとにしたエッセイやコラムなどを用いるため、表1にあげる書籍を用いた。その中から風景を評価している記述を抜き出した。抜き出した記述は119個で、70人によって書かれたものである。記述者は主に、俳優や小説家、エッセイストである。一般の生活者を被験者として、自由記述形式のアンケートなどを取る事も考えられるが、アンケートということで構えたり、文章として記述するとき、構えてしまったりする可能性がある。したがって、感じたことをそのまま文章として記述する能力がより優れていると思われる、前者によって記述されたもののほうがデータとしてより適切である。

表1 データソースリスト

題名	編集・出版	発行年
私の好きな、東京。	東京ファッション協会	1996
東京都心散歩 品川区	S&E 研究所編集 日本経済新聞社発行	1995
東京都心散歩 中央区		
東京都心散歩 港区		
東京都心散歩 新宿区		
東京路線バスの旅 part1	トラベルジャーナル 編集・発行	1994
東京路線バスの旅 part2		1995
東京セレクション 花の巻	住まいの図書出版局発行 星雲社発売	1988
東京セレクション 水の巻		

3 データの分析

3.1 データの分析方法

データを分析する方法として、本研究では、それぞれの記述の「着目点」に注目し、データをその「着目点」別に分類した。次に、それらの「着目点」について考察した。^{注5)} その際、あらかじめ、＜住宅地＞＜商業地＞、または、＜都心＞＜郊外＞などの分類はあえて行っていない。それらは、「物」や物の「用途」という概念を用いた枠組みであって、都市観察者の都市解釈枠組みを明らかにしようとする場合、適切な分類方法ではないと考えるからである。

3.2 データの分析・分類

エッセイやコラムから抜き出した、119個の記述を分類するため、それぞれの記述の「着目点」に注目すると、17個の着目点が抽出された。それらは表2に示すとおりである。それぞれのカテゴリーには、着目する元になった物理的認識像、それらから想起された感覚的認識像やイメージ像、都市を解釈する時に行われる行動、その結果及ぼされる心理的影響を必要に応じて模式的にあらわした。

生活の匂い

物理的認識像 感覚的認識像 心理的影響

平凡な商業地区（狭い通り）
 平凡な住宅地区（狭い通り）
 人ごみ
 <静寂>

生活の匂い → 安堵感

生活空間の活力

物理的認識像 感覚的認識像 心理的影響

生活している人 → 活力 → わくわくする

平凡な商業地区（狭い通り）

住む人の作るまちの表情

物理的認識像 感覚的認識像

平凡な商業地区
 平凡な住宅地区
 生活している人

住む人の気分 → まちの表情

物を通して見える人

物理的認識像 イメージ像 覚的認識像

（視覚像） → それを作った人 → 風情・面白さ

都市の新陳代謝

物理的認識像 感覚的認識像

近代的人工構造物
 新旧の混在
 若者

都市の
新陳代謝 → エネルギー

今に生きて残っている歴史

物理的認識像 感覚的認識像

古いもの
 新しいもの

古いものが生きて残っている
 混在・調和

まちの裏

物理的認識像 行動 感覚的認識像

狭い通り うろろする まちの「奥」を発見する
 裏通り

<合理性>

<u>隠れた居酒屋通り</u>		
<u>物理的認識像</u> ひっそりとした居酒屋 (暗い裏通り) ↗ ↘ <人ごみ・にぎやかさ>	→	<u>感覚的認識像</u> 落ち着き 隠れ家的な場所 (まちの裏)
<u>あやしげな繁華街</u>		
<u>物理的認識像</u> あらゆる物の混在	→	<u>感覚的認識像</u> あやしさ
<u>都会の中の死角</u>		
<u>物理的認識像</u> 昔ながらの住宅地区 ↕ 対比 <都心の雑踏>	} →	<u>感覚的認識像</u> 置き忘れられたような場所
<u>変化のある地形</u>		
<u>物理的認識像</u> 坂・運河 変化する風景 ↕ <平べったい地面>	行動 散歩 思いもかけぬ発見	<u>感覚的認識像</u> 独特の風情 陰影
<u>虚の空間</u>		
<u>場所</u> (静かな)公園 高級住宅地 高速道路	行動 散歩 ドライブ	<u>感覚的認識像</u> 別世界 <日常の空間>
<u>自然のもたらすバリエーション</u>		
<u>物理的認識像</u> 水 小動物 植物	行動 変化 植物があること 散歩 眺める	<u>心理的影響</u> 飽きない 面白い

による空間的变化

表 2-3 都市解釈における着目点

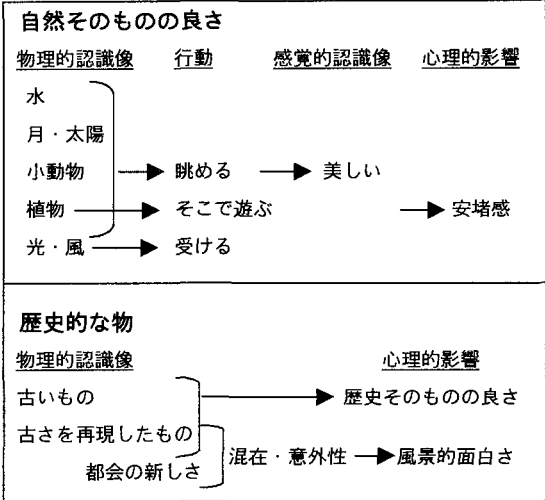
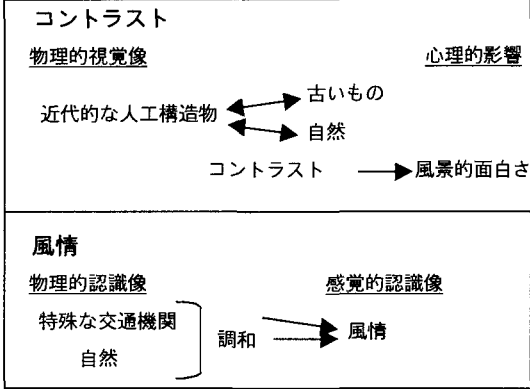


表 2-4 都市解釈における着目点



3. 3 都市解釈の枠組みの分析

3. 2 であげた、17 の「着目点」を、相互関係を考慮し、より普遍性のある大きな枠組みで捉えられるように、図1のようにまとめた。

その結果、次の三つの言葉が得られた。これは、都市景観を認識する時の解釈枠組みといえるだろう。また同時に、都市観察者が認識している都市の魅力をつえるための要素ともいえる。

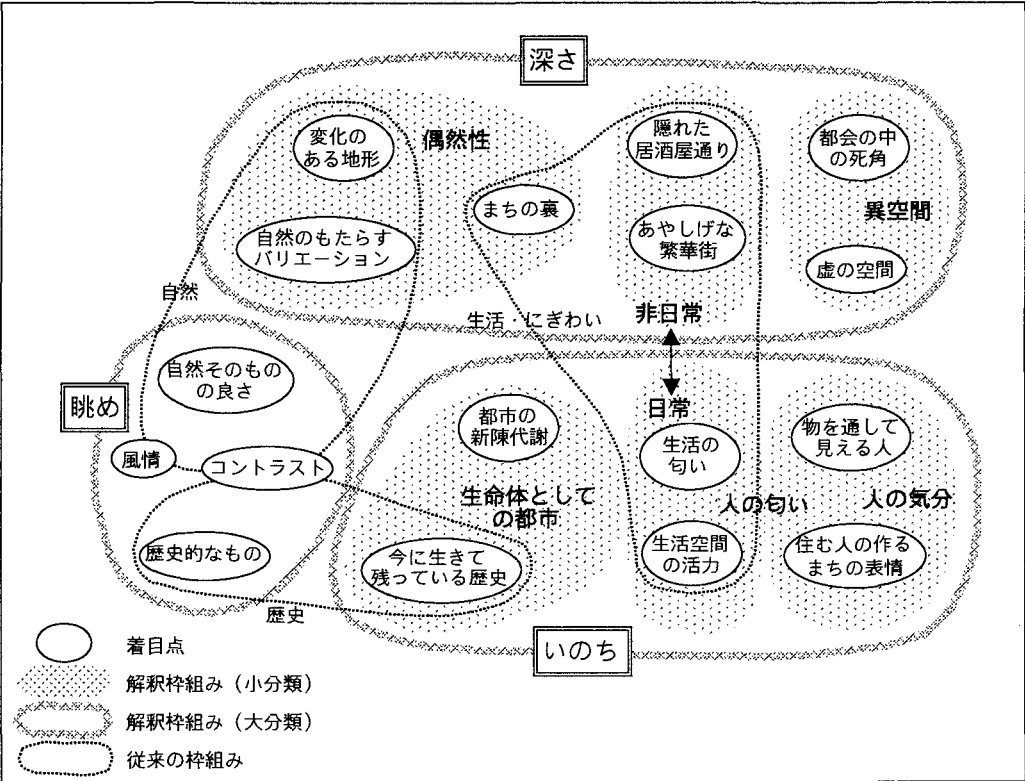


図1 都市解釈の枠組み

都市解釈枠組みの要素

- ・ いのち…変わりゆく都市に生命体としての活力を見たり、そこで生活する人々のにおいを感じる。
- ・ 深さ……それぞれ異なる雰囲気を持った地区が混在していたり、土地に高低があったり、都会の中に水や緑などの自然のある地区があることによって、まちに深みを感じる。
- ・ 眺め……新しいものと古いもの、巨大な人工構造物と自然、歴史的なものとのコントラスト、自然美、歴史的なものの良さ、風情を醸し出すものがあって、眺めることを誘われる。

4 結論およびデザインへの活用

本研究を通じて明らかになった結論は次の通りである。

- ① 都市観察者が都市を解釈する時、何に着目しているのかを、タウンウォッチングを用いて明らかにした。
- ② 引き出された着目点を分析し、都市がどのような解釈枠組みで捉えられているかを明らかにした。

なお、ここで得られた結論は、都市観察者に捉えられている魅力の要素であって、そのまますぐにデザインに応用できるわけではない。ところで今までの景観デザインにおいて、「にぎわい」「自然」「歴史」などに着目したり、景観の良さを「パス」「エッジ」「ディストリクト」「ノード」「ランドマーク」などの空間的要素に着目して魅力の要素を捉え、都市景観の魅力を創造しようとしてきた。しかし、こうしてデザインされたものが予想に反しておもしろみに欠けていたり、また、こうした魅力の要素では理解できないおもしろさがあったりするの事実である。したがって、今後は都市景観をデザインするにあたって、「空間」はそのままの物理的に把握できる形で捉えられているのではなく都市観察者による解釈で捉えられていることを把握し、その空間における解釈枠組みや魅力の要素を考慮することが重要であると思われる。

参考文献

- 1) ケヴィン・リンチ著 丹下健三 富田玲子訳 : 都市のイメージ 岩波書店 1968 年発行

補注

- 注1) 『濠と門によって外の喧騒から遮断された別世界を、都心でちょっと空いた時間などに散策するのは、なかなかの贅沢である。』（清家篤）私の好きな、東京。（表1）より抜粋。
- 注2) 『24 歳のある少年は、夜、ビルの谷間を歩くと、森をさまよっているようでほっとして自分を取り戻すと語った。』（宰相葉月）東京都心散歩 新宿区（表1）より抜粋。
- 注3) 『バス停の多くには、家庭で不要になった椅子がさりげなく置かれていたりする。中には、まだ使えそうな立派な革張りの椅子まであったりして、バスを待つ間の世間話がはずむ場所をしっかり確保している。』（佐々木幹朗）東京路線バスの旅 part1（表1）より抜粋。
- 注4) 『路地には、下町とはまた少しニュアンスのちがう気分で、いくつかの鉢植えが飾られている。これ見よがしというのでもなく、さりとして、せっかく丹精した作品だから自分ひとりで見ているのも味気ない、ちょいと外を通る人にも拝ませてやるか……ごく、やんわりとした力まない古風な娑婆っ気がこの界隈にはゆったりとただよっているようだ。』（松村友規）東京セレクション 水の巻（表1）より抜粋。
- 注5) 例えば、『橋の上から下を見ると、冬になると鴨が遊び、夏にはクラゲが海から逆流してくる。川面を見ていて飽きることがない。』（佐々木幹朗）東京路線バスの旅 part1（表1）と、『代官山の歩道橋の上でちょうど夕方だと、ビルとビルの谷間に、夕日が見えたり、空を見上げると、月があったりして、とってもきれいです。』（横森理香）私の好きな、東京。（表1）は、共に自然についての記述であるが、前者は、自然のもたらす「変化」に面白さを見出している。一方、後者は、自然を眺めてそこに絵画的な美しさを見出している。したがって、「自然のもたらすバリエーション」「自然そのものの良さ」という異なる着目点の分類を行った。